特　集

「人と自然が共生する夢洲をどうつくるか」

～二〇二五 国際博覧会会場と跡地計画を考える～

第4回 夢洲 オンライン講演会

文・写真　藤原 宣夫
（理事・夢洲生きもの調査グループ）

夢洲万博会場予定地　2020年11月29日、夢洲2区。埋め立て工事が急ピッチで進んでいる。この上に万博パビリオンと円形状観覧プロムナードの建設が予定されている。どんどん狭くなる池にはこの撮影時、水鳥15種1,700羽超、特にホシハジロは1,200羽がいた。

講演会概要と開催趣旨

夢洲オンライン講演会は、2020年5月に夢洲の万博会場予定地において約500羽のコアジサシと抱卵が確認されたことを受け、緊急企画としてNPO地域づくり工房に協力を仰ぎ、6月20日に「コアジサシから考える夢洲の生物多様性」と題して第1回が開催されました。その後、第2回「海岸・湿地植物から考える夢洲の生物多様性」（8月21日）、第3回「夢洲に干潟を－シギ・チドリにとっての日本の港湾都市」（9月26日）と、野鳥や植物の専門家を講師として回を重ねてきました。第4回となる今回は、趣向を変え、万博会場整備と大規模開発事業における環境の保全に造詣の深い町田誠氏と傘木宏夫氏を話題提供者としてお招きし、『人工島ではあっても、既に野鳥の宝庫となった夢洲で、どれだけ野鳥生息に配慮した万博会場計画、跡地利用計画が作れるか勉強しよう。』という趣旨のもと、シンポジウム形式での開催となりました。概要は以下のとおりです。

＜講演会概要とプログラム＞

◆日時：2021年1月20日（水）
　　19時より21時

◆会場：Zoomウェビナー

◆プログラム：

1）主催者より「夢洲の自然環境」紹介、夏原由博（当協会会長）

2）話題提供①；「万博会場建設・運営における環境配慮」、町田誠氏（SOWING WORKS代表）

3）話題提供②；「工業地帯での環境再生事業と市民活動」、傘木宏夫氏（NPO地域づくり工房代表）

4）パネルディスカッション；人と自然が共生する夢洲をどうつくるか、進行；藤原宣夫（当協会理事）

参加者数は47名を数え、終了後の交流会にも多数の参加を頂きました。本稿では、講演会の内容の一部を抜粋して紹介します。

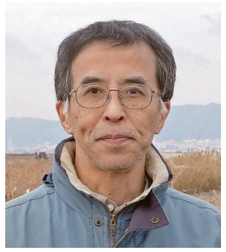
1）夢洲の自然環境（夏原）

夢洲は大阪港北部の埋立地のひとつです。夢洲の南には、南港野鳥園があり、私たち保全協会では、この2つをセットにして野鳥の生息地として保全する必要があると考えています。

環境省のモニタリング1000シギ・チドリ調査において、夢洲では最大2,252羽の飛来数を観測しており、東京湾の干潟に匹敵するものとなっています。私たちも2019年6月から調査を開始しており、調査の結果をフォトアルバムにして公表しています。昨年（2020年）4月には500羽を超えるコアジサシの群れを観察し、5月には埋立て後の砂利の地面で繁殖行動を確認しました。

私たちは、繁殖地内での工事休止を大阪市にお願いし、工事は行われませんでしたが、ボーリング調査のため人や車両の出入りがあり、コアジサシはいなくなってしまいました。今年については大阪市と協議し繁殖可能な場所の確保を約束しています。

これからの課題として、万博協会が公表している会場の絵からは全く自然が感じられない状況ですので、夢洲に今現在創生されている自然を護っていくための具体的な提案をしていきたいと考えています。



夏原 由博（なつはら よしひろ）
(公社)大阪自然環境保全協会会長、名古屋大学大学院環境学研究科教授（保全生態学）.

『夢洲と南港野鳥園をセットにした野鳥の生息地保全が必要。』

夢洲と南港野鳥園は生物多様性ホットスポットAランク

夢洲は、隣接する**南港野鳥園**とともに、**『大阪府レッドリスト2014』生物多様性ホットスポット（55か所）の**中で、**もっとも重要なAランク（16か所）**として選定されている。

ここに**万博・IRが計画**されたことで、私たちは生きものたちの棲む環境がどのようになるのか、2019年より調査を始めた。

2）万博会場建設・運営における環境配慮（町田）

愛知万博は21世紀最初の博覧会として環境万博と位置づけられました。テーマは「自然の叡智」です。会場は、当初は瀬戸会場（海上の森）に計画され、跡地に住宅団地が建設されることが決まっていました。しかしオオタカの営巣の発見により主会場が長久手会場（青少年公園）に変更され住宅団地の計画はなくなりました。

2005年開催の愛知万博では、2001年12月に「環境配慮の考え方」が公表されました。大阪万博にあてはめると、2025年開催予定ですから、2021年の今年がその年に当たるわけです。この環境配慮の考え方には、(1)環境影響評価を実施すること、(2)自然の地形・素材を活用し、環境への負荷が少ない会場づくりを行うこと、(3)最新の省エネルギー、リサイクル技術を導入すること、(4)建設と運営において、3R（レデュース、リユース、リサイクル）を実施すること、(5)公共交通機関の利用を促進すること、(6)楽しみながら、環境について学ぶ機会を提供することが、うたわれています。この考え方は、2003年には環境方針、環境目標として定められます。私は、みんなで勉強しましょうという6番めの考え方が、愛知万博のレガシーのひとつであると考えています。

愛知万博では2002年に修正環境影響評価書が出され、会場整備開始から開催終了後まで、追跡調査が実施されることになりました。

会場整備においては、グローバル・ループという1周2.6kmの空中回廊を作りました。できれば平らであってほしい万博会場ですが、長久手会場は起伏に富んでおり、グローバル・ループにより、起伏のある地形の改変を最小限にし、希少な動植物の生息地を迂回しながら、来場者は会場のパビリオンなどの施設を自由に移動できるようになりました。14個ほどあったため池も手を付けなかったのですが、唯一、鯉の池のほとりにあった樹林を、スタンドを作るために撤去したのが心残りとなっています。

実際どの程度改変を避けられたかですが、長久手会場では会場面積158haに対し造成面積は54.6ha（34.6%）となりました。けしからんと言われるかもしれませんが、私にとっては致し方ない数字です。樹木の伐採については、会場整備に支障となった高・中・低木10,006本、50,372株について、できる限り、会場内外での移植、一般への無償配布などを行い6,308本、38,936株に抑えました。

愛知万博のレガシーですが、新たな開発を止め、できる限り、既に自

町田 誠（まちだ まこと）
SOWING WORKS 代表、元国土交通省公園緑地・景観課長、愛・地球博の会場整備に従事.

『グローバル・ループは、地形や池の改変を最小にし、希少な動植物の生息地を迂回するように設計されました。』

傘木 宏夫（かさぎ ひろお）
NPO地域づくり工房代表理事、長野大学非常勤講師、環境アセスメント学会常務理事.

『子供たちや学生が、ゼロからどのようにして自然が産み出されるのか体験することに価値があるのです。』

然の地形が改変された場所を使って会場整備を行ったことが第一のレガシーと言えるのではないかと思います。博覧会後は愛・地球博記念公園となり地球市民交流センターという環境に取り組む人たちが集まり、活動を支える施設が作られました。こういったものを作ったことが2つ目のレガシーだと思います。愛知県と名古屋市は、この後生物多様性条約COP10やESDに関するユネスコ世界会議を開催し、環境に対する取り組みをきちんと打ち出しています。

3) 工業地帯での環境再生事業と市民活動（傘木）

注）傘木氏からは、ラベンナコンビナート地帯の自然再生、ミラノ市民の森、グランドワーク・トラスト、IBAエムシャーパークの4事例が紹介されましたが、ここではグランドワーク・トラストについて報告します。

グランドワーク・トラストはイギリスで生まれました。工場の敷地をパートナーシップにより緑化するという発想で企画され、サッチャー政権下、政府が職員3人分の人件費を補助し、それ以外は自主財源という仕組みで、1982年に第1号のSt. Helens, Knowsleトラストが誕生しました。それが全国各地に広まり、日本でもグランドワーク三島が生まれています。

第1号のグランドワーク・トラストの緑化は、ビートルズで有名なリバプールで始まります。子供たちの空き地探検隊の取り組みから、工場の資材置き場を、公園にしようという提案がなされ、そこから工場従業員との協働の取り組みで公園が作られ、従業員が屋外で昼食をとるようになります。次は石炭公社のボタ山です。環境浄化事業を民間業者の10分の1の費用で請負い、失業対策事業で緑の丘とします。丘の向こうには野外音楽堂があります。これは梅田にあったような鉄道の操車場を、大学の生態関係の学部と協力し、学生の就業訓練として森を作り出したものです。次の写真の建物は工業団地内の新聞社の印刷工場ですが、その隣に売れ残った工場用地があります。そこでグランドワーク・トラストが緑化を行っています。この緑地は工場用地として土地が売れた場合は無くしてしまうということで、私がグランドワーク・トラストの理事長に、「せっかく作りだした自然なのに、もったいないではないですか。」と質問すると、「それはいいのです。子供たちや学生が、ゼロからどのようにして自然が産み出されるのか体験することに価値があるのです。」と答えがあり、そんな考え方があるのかと感心したことがありました。

4) パネルディスカッション；人と自然が共生する夢洲をどうつくるか

藤原：2020年12月に公開された大阪万博基本計画には環境配慮に関する記述が全くありません。これから会場整備を行う上でどういう環境配慮をすべきでしょうか。
町田：「いのち」というテーマを掘り下げて会場に具現化して見せてほしい。大阪湾の自然性を通じて「いのち」にアプローチすることが求められます。
藤原：基本計画ではSDGsとの関連が述べられていますが、自然環境については言及を避けています。
傘木：SDGsは総花的なものなので、ここでは具体的に、大阪湾の過去の自然破壊を踏まえ、現在の自然再生から将来を見据えたものとすることが、大阪で開催するSDGsを目的とした万博にふさわしいと思います。
藤原：整備中から開催中、跡地利用へと、野鳥の生息環境は大きく変化します。時間変化を踏まえた保全計画を当保全協会は考えるべきではないでしょうか。
夏原：生態学的にどういう環境が必要かはわかるのですが、それを計画化していく技術がありません。デザイナーの力を借りたいと考えています。
藤原：森があった愛知万博と何もなかった大阪万博では環境配慮の考え方は違うと思いますが。
町田：愛知万博では、残された自然を護っていくというアプローチでしたが、大阪万博では、もとは何もない埋め立て地から始まるわけですから、埋め立て地における環境の創出、これからは環境を作り出していく時代なのだということを、強く打ち出していくべきです。
藤原：愛知万博ではオオタカ、大阪ではコアジサシの存在があります。コアジサシの生息環境をどう確保していくべきでしょうか。
夏原：草が生えてもだめなので、パーマネントな繁殖地を確保することは難しいです。開発地を順番に使っていくようなことができればと思います。コアジサシはひとつのシンボルと思いますが、大阪湾に昔あった、浜などの環境もあわせて考えるべきだと思います。
藤原：万博後の環境保全はどうあるべきでしょうか。
傘木：どうあるべきかを考える場を作ることが大切です。その場には生態学者の関わりが必要です。現在の万博プロデューサーの弱い部分だと思います。どう作るかではなくて、そのためにどう議論するかの提案が必要です。
町田：万博をやることが目的化しているので、もっと先をみてほしい。愛知万博には全国からNPOが集まり、皆で議論して、自然保護や社会づくりを行うきっかけを作ったと思います。
夏原：ロボットとITばかりではなく市民が語り合える、何かを創造できるような場になってほしいと思います。
傘木：跡地には、将来に向けた「余地」を残すべきかと思います。そこは議論の余地でもあります。
藤原：水面は余地としてほしい所です。

（ここで視聴者の質問に対応…省略）

藤原：最後に一言ください。
町田：これからの臨海部を「いのち」というテーマのフィルターをかけて議論できたらいいのかなと考えます。
傘木：愛知万博がそうであったように、大阪万博が持続可能な社会の実現に向けた新しい制度の市民からの提案の場になればいいなと思っています。
夏原：皆さんどうもありがとうございました。愛知万博の時には自然保護団体を含めた万博検討会議が設置されました。新型コロナのため集まりにくくなっていますが、大阪でも様々な方法で、幅広い人達が万博について考えていける場を作りたいと考えています。